第５回教育懇談会議事録

日時：平成 25 年 6 月 4 日（火）15:30～17:30
場所：愛知県三の丸庁舎　アイリスルーム

＜大村知事＞

本日は、お忙しい中、５回目の教育懇談会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

また、今回も特別参加という形で、江川達也様にご出席をいただきました。重ねて感謝を申し上げます。皆出席でございます。また今日も忌憚のないご意見をいただければというふうに思っております。

さて、この教育懇談会、昨年５月、ちょうど一年前にですね、これからの愛知の教育につきまして、その時々のテーマを設定してですね、広くご意見をお伺いし、そしてその方向性というか議論をしたものを、また関係部局にさらに詰めてもらうと。こういうことで進めてきたわけでございますが、特にですね、今日、５回目の懇談会の議題は、去年２回目に議論した愛知県の公立高校の入学者選抜制度と、今年の年明けから全国的にも大きなテーマとなりました体罰の問題ということでございます。

高校入試制度につきましては、昨年７月 27 日の第２回懇談会でご議論いただきまして、いろんな角度からご意見をいただきました。その皆様からのご意見を踏まえまして、昨年９月に「愛知県公立高等学校入学者選抜制度の改善に関する検討会議」を立ち上げて、そこで、この懇談会で出された意見も踏まえまして、幅広い視点からいろんな課題を整理いたしまして、ある一定の方向性といいますか、たたき台をつくったところでございまして、今日、ご報告させていただきますので、大いにまたご意見をいただければというふうに思っております。

教育は、幼児教育から、小学校、中学校、高等学校、大学とありますけれども、大学はやはり国がきちっとですね、国家の大きな戦略として、高度人材づくりをやっていただくということであろうかと思いますが、我々の役割は、やはり幼児教育、幼稚園、保育園から、小・中・高、初等・中等教育を担っていく、それが、我々県政の大きな大きな役割だと思いますし、やはり高校のあり方がその地域の特色とか、教育のあり方を大きく決めていくということにもなろうかと思います。そういう意味では、大変大事なところだと思います。愛知県は、複合選抜という全国的にも稀な制度をやっております。それについて、縦横斜めから、いろんな角度からご意見があろうかと思いますが、是非そういったご意見をしっかりいただいてですね、よりよい高校、我々に課せられたこの地域を担っていく人材づくりという役割を果たしていきたいというふうに思っておりま

す。

つづきまして、もう一つは体罰問題ということでございまして、これはですね、大変痛ましい事件が各地であって、そしてこの愛知でも体罰の問題はあったわけでございます。このことについてはですね、当然法律で禁じられているわけでございまして、教育への信頼を失墜させる行為でもあると思います。一日も早く解決をしていかなければならないと思いますし、その点については、私ども公立、私立合わせて調査もいたしました。体罰の防止に向けた指導をどうしていくのか、こういった点につきましても、また忌憚のないご意見をいただければというふうに思っております。

今日も盛りだくさんのテーマでございますが、時間も限られておりますので、さっそく始めさせていただきたいと思います。今日は何とぞよろしくお願いします。

［事務局から出席者紹介・資料確認］

＜大村知事＞

それでは、さっそく始めさせていただきたいと思います。

前半の議題の愛知県公立高等学校入学者選抜制度につきまして、教育長から、このたびの検討会議のまとめについて説明をお願いします。

＜野村教育長＞

資料の１ページをお開きいただきたいと思います。

まずは、経緯についてでございますが、昨年９月に愛知県公立高等学校入学者選抜制度の改善に関する検討会議を立ち上げ、以来、検討会議を９回、ワーキンググループを６回開催し、第２回教育懇談会で出していただきました意見を踏まえて検討してきたところでございます。そして、先月 24 日に開催した第９回の会議においてまとめが得られましたということでございます。

検討にあたりましては、改善に向けての六つの視点を提示させていたところでございます。「学区、群及びグループについて」、「一般入学における２校受検のあり方について」、「推薦入学のあり方について」、「一般入学学力検査及び面接について」、「学力検査と調査書との比率について」、「入試日程のあり方について」でございますが、それらに沿いまして、検討会議で検討していただいたところでございます。それぞれの視点について出された主な意見は、それぞれの視点のところに紹介させていただいております。

資料の２ページをご覧ください。今回得られたまとめでございます。まとめの内容について、１から８まで、順にご説明をさせていただきます。

１点目は、２校受検についてでございます。第２回教育懇談会でも、２校受検が可能な制度はよいとの意見が出ておりましたけれども、検討会議においても受検生は公立高

校を複数受検する機会が確保されているので、安心して受検できるため利点が大きいとの意見が出され、引き続き維持することといたします。

それから２点目は、学区、群及びグループについてでございます。

普通科における学区につきましては、第２回教育懇談会では全県１学区にしてはどうかとの提案もいただきましたが、現行の２学区制が受験競争の激化を緩和している面もあることから、現行の尾張、三河の２学区制を維持することとしております。

また、地域における高等学校の選択肢を拡大することが重要であると、こういう考え方から、学校数の少ない三河学区につきましては、二つの群を一つにするとともに、Ａ、Ｂのグループ分けを一部見直しをいたします。尾張学区については、これまでの群及びグループの組み合わせを基本にしながら、通学の負担が少ない地元の高等学校にできるだけ多くの生徒が進学できるよう、群及びグループ分けと１・２群共通校の一部見直しを行うことといたしております。

群及びグループ分けの見直しに際しましては、尾張、三河いずれの学区におきましても、特定の学校に志願者が集中することのないように配慮してまいりたいと考えております。

３点目と４点目は、推薦入学についてでございます。

現行の推薦入学は、３年間の中学校生活の様子や本人の努力する姿勢、個性を認めるよい制度であるとの評価をいただいておりますが、一方では、推薦入学で合格した生徒は、一般入学で合格する生徒よりも１ヵ月早く進路が確定するために学習量が減るなどの課題も指摘されました。

また、本県の入試日程が、２月中旬の推薦入学に始まり、３月中旬の一般入学（Ａ、Ｂグループ）、さらに３月下旬の第２次選抜と、長期にわたることや、一般入学の合格者発表日が３月 20 日前後と他県に比べて非常に遅いことも、課題となってきたところでございます。

そこで、推薦入学の趣旨を生かしつつ、一般入学に先立って実施されてきた推薦入学を、「推薦枠」として一般入学の中に取り込んで行うことといたします。これにより、入試日程の短縮と合格者発表日を早めることができる制度となると考えております。

５点目と６点目は、学力検査と面接についてでございます。

従来の推薦入学を「推薦枠」として一般入学の中に取り込むことにより、全日制課程の全ての受検生が学力検査を受けることになります。学力検査は、新学習指導要領の趣旨を踏まえて、「基礎的・基本的な知識及び技能」に加え、それらを活用して課題を解決するために必要な「思考力、判断力、表現力等」をこれまで以上に測る内容といたします。

また、入試における面接は、高校生活に対する意欲等を測ることができるものということでございますので、これまで同様、全ての受検生に課すこととしたいと思います。

面接方法等については、「推薦枠」の受検生を別に実施するなど、高校によって工夫できることといたします。

７点目は、学力検査と調査書の比率についてでございます。

中学校の教育活動の成果を高校入試においても評価していくため、検討会議では、各高校での校内順位を決定する際のⅠ型、Ⅱ型、Ⅲ型、要するに学力検査と調査書の割合でございますが、これについては、現行の方式を基本とすることが望ましいとされております。

また、学力検査及び調査書の特定教科の比重を更に高める選択、いわゆる傾斜配点ということでございますが、これについては、現行制度においても音楽科、美術科等の特定の学科で実施しておりますが、これを引き続き実施することとします。学力検査の比重をもっと高められないかとのご意見も教育懇談会でいただいておりますので、実施校を拡大するかどうかやどのような実施方法にするかについては、今後、８に記載しておりますとおり、入学者選抜方法協議会議の場で検討してまいりたいと考えております。それで、８番目でございますが、今後のことについてまとめております。

新しい入試制度の詳細や、海外帰国生徒選抜などの特別な選抜のあり方等については、今後、入学者選抜方法協議会議で具体的な方策を検討していくことを明記しております。

なお、実施時期については記載しておりませんけれども、十分な周知期間を取る必要があると考えておりますので、現在の中学校２年生、３年生では難しいと考えております。従いまして、早くて現在の中学校１年生が受検する平成 28 年度入試からというふうに考えております。

３、４ページは参考資料でございます。高等学校の立地状況と、今回検討会議でまとめを受けたものを図示したものでございます。

＜大村知事＞

それでは今回の検討会議の座長を務められました中野先生から、検討会議での議論など補足的なことも含めまして、ご発言をお願い申し上げたいと思います。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞

今、教育長から、まとめについて報告されました。この検討会議を始めるにあたりまして、大きくいろいろなことを考慮しました。

一つはですね、これまで愛知県が行ってきた複合選抜のメリットとデメリット、そういうものを洗い出していくという作業から始め、それから受検する生徒の立場を考慮していく、それが第一であるということで、会議の冒頭、そういうことをお話させていただきました。

それから、義務教育の中学校の教育をしっかり生かす形での入試でないと、高校入試

というのは問題が起こるということ、それから前からここでも出ておりますけど、地域が生徒を育てる、そういう点は十分考慮していくこと。それから、高校の特色がいかに出やすくするかという配慮、そういう点を踏まえて、先程、教育長が言われました各点につきまして、メリット、デメリットを挙げて、検討させていただきました。

一つは、２校受検は概ね支持されているのですけど、それでも、例えば、２回受検２校受検型であるとか、或いは１回受検２校志願型、或いは前期、後期選抜について検討しました。この前期、後期もですね、前に第２回の時懇談会も出ておりました。それでですね、出していただいた資料を基にいろいろ検討していただいただき、２回受検というのは受検者にとっても、これは安心できて受検、勉強できるという状況であるということで、この２回受検、２校受検が可能であるという現行制度というところに落ち着きました。

前期･後期の問題でございますけれども､これも全国的のいろいろな県を調べた時に、一時は前期･後期に向かったんですが､その後やめるところが多くなってきております。前期でかなり落ちたりして、その心理的負担、そのことでこれは受検者のことを考えるとこの問題も検討させていただきました。それでデメリットが多いということで、今回のように落ち着きました。

学区、群でございますが、これも前から選択の幅が少ないと出ておりました。１県１区という案もあるんですけれども､愛知県でこれだけの学校数の中ではかなり難しいし、ますます競争が激化して、学校格差を起こすと。やはり地域が育てるということを考えると、今の学区、群、ただ三河の方でかなり選択が狭まれておりましたので、三河を一つにするというところで多くの方の合意を得られたという状況でございます。

それから推薦については、別途実施してきましたけれども、推薦入学から一般入学のところがかなり時間があったり、全体の日程がタイトになったりします。推薦については、ほとんどの委員の方が必要である、あった方がいいという意見で、先程の形のように、一般入学の日程の中に食い込んでいくという形でまとまった次第でございます。

それから、学力検査の問題でございますが、これは一般学力検査と面接で、面接の重要性が一致いたしました。それから今回、学力検査につきまして、新指導要領に則りまして、思考力や判断力であるとか、学んだことが反映できる形をとるということで、試験の時間を少し延長しても、学力のところを検討することです。ただ詳細は入選協ですると思いますけれども、出題についても十分配慮していくというふうになっております。

それから、先程の調査書と学力の比重の問題ですけど、現行のⅠ型、Ⅱ型、Ⅲ型を基とするといたしました。かなりこれも議論になりましたけども、ただ比重を変えるということによって、全県的に学力を高めていった時に、受検競争をもたらしてはまずいと、やっぱり中学校での学習を十分落ち着いてできるということを考えますと、やはり

現行のⅠ型、Ⅱ型、Ⅲ型を基にする。ただ高校の特色を挙げているのは、傾斜配点的なところで、先程お話しがありましたが、今までやっていたところをもう少し拡大するかどうかということも、今後の検討に残すという形でまとめのところに落ち着いた次第でございます。

あとは推薦枠などについてです。このへんも検討会議では、私学の方とかいろいろな方から推薦枠についていろいろ議論が出ました。例えば、経済的困難な生徒の枠とか。これも今やっている学校の裁量で、これから学校の特色を出すためにはどういうふうに考えていくかということを、これからの検討課題としてやはり柔軟に少し残しておくという形で話しはまとまったところです。

第２回のここの懇談会で出た意見、私学協会の委員からも資料をいただきました。それから全国のいろんなところを調べながら、いろいろ検討をしていって、先程言いましたように、メリット、デメリットを一応全部洗い上げて、愛知県として、今、生徒にとっても、或いは保護者にとっても、全県にとっても、これがいいだろうという形で一応の合意を得たという状況でございます。

＜大村知事＞

ありがとうございました。それではまた後ほどご意見をいただくことといたしまして、それでは江口さんから、席の順番で、一人ずつご意見をいただければと思います。

＜共立総合研究所取締役副社長　江口忍氏＞

お手元に、第２回会議の時に私案として出したものがあります。１年前に議論した話なので、皆さんお忘れになっていると思い持ってまいりました。３ページ目を開いていただきたいのですが、そこに私がその時出しました、私の個人的な案というものがございます。今でもこの考え方自体は変えておりません。

この私案のポイントはいくつかありますが、まず、２校受検はＯＫ。ただ、現状の複合選抜と違って、前期、後期の２回受検。群・グループは廃止、全県一学区。内申とテストの比率の判断は高校に委ねる。現行の制度で言いますと、千葉県の公立高校入試が比較的これに近い制度になっています。残念ながら先ほど中野先生からご説明いただいて、いろいろ考慮はしていただいたようですが、結果的にこの私案とはだいぶ違うものがまとめとして出てきたようでございます。

私の考えの基本的な方向は２つございます。１つ目は、受検生が自由に学校を選べるようにすることが第１点。第２点は、高校側の選抜基準の裁量を拡大する。高校も自分の望むような内申と学力テストの比率とかですね、ということをやっていけばいいじゃないかと。一口で言いますと、入試制度の自由化、規制緩和と言えるかもしれません。

自由化とか規制緩和、世の中で流行りになっている言葉ですが、自由化や規制緩和と

いうのは、基本的に強いところをより強くする側面がございます。学校で言いますとどういうことになるかと言うと、トップ校はより難しくなって進学実績が上がる、受験戦争が激化するということに繋がってまいります。そのことに対してどう考えるかっていうところが、おそらく県教委の検討会議の意見と私の考えの大きな違いに繋がっていると思います。私はもともと教育関係者ではなくて、地域の発展、地域の競争力を強めるということを、どうやっていったらいいかということを考えるのが立場でございますので、そういう点で言いますと、教育というのは、いわゆる地域のキラーコンテンツ。国にとっては、いい大学があることはその国の競争力に繋がる、地域の中にいい大学があれば、それはその地域にとってメリットがある。高校も同じように、前にもお話しましたけども、現状、愛知県にはそこそこいい学校は並んでいるんだけど、じゃあ関東や関西と比べた時、教育環境という部分で愛知県がチョイスされない部分があるのではと思っています。

したがって、入試制度をもっと自由化して、そこでいい学校を作っていくということは、地域戦略として一つの方向として考えられるのではないかと。ただこの話っていうのは、教育委員会さん、あるいは今回の検討会議さんの検討テーマとしては馴染まない話なので、そういう側面、つまり学校の教育以外の側面ということを、この会議、あるいは他の地域の競争力を高めるような会議というのが愛知県では行われていますので、そういう場で進めていってもいいのではないかなと思っています。

尾張と三河の２学区制廃止も基本的には入試の自由化という考え方からなのですが、もう一つ付け加えておきたいのは、愛知県では、ずっと尾張と三河をいろんな部分で何かと分けたがる、分けられるということが社会的弊害と感じております。学校、教育の側面からだけで見れば、尾張と三河はエリアもそれぞれ広いですから、学区が分かれているのも合理的だとは思うのですけど、これを分けていることによって、尾張の人は三河のことをあまり知らない、三河の人はあまり尾張のことを知らない。その意識というのは、ずっと大人になっても色濃く残っていく弊害はやはり指摘したいと思います。学区を全県にしたところで、実際に遠距離通学がものすごく増えるという可能性はあまりないと思います。あくまで意識の問題として学区をなくしてもいいんじゃないかというのが私の立場です。

今回一番私ががっかりしたのが内申の扱いです。第２回の会議の場でも、私以外の複数の委員の方から内申比率が高すぎるんじゃないかという指摘がございましたが、この点に関して今回あがってきたまとめは、Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型は従来同様維持とされており、完全にゼロ回答でした。私が内申について大変気になるのは、選抜の公平性という観点です。入試というのは選抜行為ですので、その評価が公平になされるべきものであると思うのですけども、内申点の付け方という部分について、公平性の検証がなされたかどうか、ということが１つ気になります。残念ながら、この県教委の検討会議は、第４回

までは議事録が公開されていましたけども、それ以降の５回分に関しては、議事録も非公開になっています。おそらくこの期間の間に、内申点の扱いの部分は議論されたのだと思いますけど、例えば、愛知県内のすべての中学校の学校別の平均的な内申点がどういう分布であるかとか、それの標準偏差の分布がどうなっているかというようなことの検証というのが、もし、現状の内申のウェイトを維持するのであれば、そこの点というのは確認をしておく必要があるのではないかと思います。

最後に推薦入試に関して。この点に関しては、今回のまとめ、一般入試との同時実施による事実上の一本化とは言いませんけど、期間の短縮にも繋がるし、推薦にも学力テストを課すという部分は、評価できるというふうに思います。

＜愛知県経営者協会専務理事兼事務局長　柴山忠範氏＞

報告書につきましては、専門家の方が１年間かけた結果ですので尊重したいと思いますが、1 つ、私ども産業界から考えを申し上げたい。格差とかそういったことを是正するという視点に立ったご説明があったのですが、教育関係の方に考えていただきたいのは、一般の社会に出ると、やはり格差は避けて通れないということです。学校にいる間に、そういう中でいかに生きる力を育んでいただくかという視点でお考えいただきたいなと思っています。

「格差」という言葉ではなくて、「違い」ということを認めて、「違い」をいかに次の社会の中で生かし、いわゆる自分の強みをいかに磨いて、別の局面で競争していく。こういうような考えがないと、みんな同じように平均点をとったのでは、先ほど江口さんがおっしゃられたように、よその地域ですとか、よその国の人たちと、とても戦って勝つということは不可能な世の中になってきていますので、是非そういった視点は忘れないでいただきたい。最終的には社会に出て生きていくということになりますので。やはり自分の持ち味、自分の強みがどこにあるかということを確認して、いかにそれを磨いていくか。そういう前提に立つと、「格差」或いは「違い」ということは、ある程度は認めざるを得ない、こういうことだと思います。

＜関西大学政策創造学部教授　白石真澄氏＞

まずはこの検討会のとりまとめをいただきました中野先生に感謝を申し上げたいと思います。私、この会議がスタートした１年前に、教育というものは、今までの、非常に偏差値の高い学校を中心とした富士山型からそれぞれの山ごとに特徴や高さのある、阿蘇山型や八ヶ岳型の構造に変わっていくんじゃないかというニュアンスをお話したと思うんですね。それに例えるのであれば、今、柴山さんもおっしゃいましたように、格差と競争を否定していくのか、それともある程度是認をするのか、全く自由競争をさせるのかによって、教育の向いていく方向は違うと思うんですね。

例えば、今、学校選択制ということで、生徒さんは選んでいるわけですけれども、ユーザーオリエンテッド、受験をする生徒さんの立場から考えたら、自分の学力で選んでいるのか、それとも運動部の実績で選んでいるのか、文化的な活動の側面か、もしくは魅力ある先生の存在や学校の歴史､家からの近さや交通費の負担などを考えているのか、それとも、社会に出たいので、社会との橋渡しができているのかと、いろんな点があると思うんですね。選択制というのであれば、それぞれの学校が選べるような特色を有していないと選べません。実態はどうなっているのか、ここやはり調べてみてもいいのではないかと思います。どのように選んでいるのか、選んだ結果、果たして自分の選んだとおりだったのかどうか。やはりこうした検証を繰り返すことによって、選ぶということと選ぶ仕組みをどう作っていくか、これはパラレルではないかと思います。

さらに今の入試の方向を少し変えるということではなく、本質的なところを議論していただきたいということでございます。その中で、やはり「違い」を認めて選ぶということは、ある程度の個性や差を認めるということでございます。偏差値や学力一辺倒ではなく、いろんな山を作っていくということを考えていかないと、先程からいろんな委員の方からも出ていますように、国際的な競争には打ち勝てないと思います。頭が良くてお勉強ができる人たちばっかりを作っていったのでは、特に、名古屋地域、愛知地域の多様な産業を支えていく人材ができないのではないかと思います。

２つ目は内申書でございます。私も教育学者ではございませんので、誤解をしている点があるかと思いますが、東京、神奈川あたりでは、内申の比率はたしか３割。よく私達が、もう数十年前でございますけど、入試の頃に先生に反抗すると内申が下がるというようなことを言ったんですが、それは今は誤解で、あくまでも絶対評価に基づいて、何段階か、例えば評価と評点というか、それを基準に決められているので、先生の客観的な判断軸が入る余地はないというふうに考えますが、それは違いますか、中野先生。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞

相対評価と絶対評価のことで、結局、相対から絶対に変わった時にですね…

＜関西大学政策創造学部教授　白石真澄氏＞

2002 年に変わりましたね。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞

はい。何が起こったかと言いますと、当初１、２年はですね、やはり学校による差はたくさん出たんです。ところが、やはり少しずつ学校が安定してきました。じゃあ絶対評価と相対評価でどちらが公平かと言うと、実は相対評価の方が不公平なんです、はっきり言いますと。そういうことを考えますとね、ただ、今は、学校によってかつてはだ

いぶばらつきがあったのが、やはり学校や地域で規準について共通認識ができまして、大きくずれていかない、という形の指導がされきて、今、そこに至っていると思います。

＜関西大学政策創造学部教授　白石真澄氏＞

なるほど。で、学校によるばらつきを、修正するのも人であるわけですよね。例えば国語であれば、国語への関心、意欲、態度、そして話す聞く能力、いろんなポイントから客観的に判断されているんですけど、このグループに入れることすら私は恣意的だと思うんですよね。だから内申書を継続していく、学力以外の部分を加味していくのであれば、できる限りここに主観的なものを排除していく必要があるんではないかと思います。

例えば､他にもいろんなことを点数化していくっていうことができると思うんですね。学校以外の、地域への貢献とか、ボランティアとかですね。そうした、もう少し客観的、かつ主観を排除したようなメルクマールを内申書に取り入れていくべきではないかと思います。

さらに、面接なんですけど、これ大学でも推薦の時にやりますが、果たしてこれって効果ありますかね。面接のために練習してきて､相当皆さん粒ぞろいだと思うんですね。これにかける時間というものを考えたら、もっと私は、特色ある試験問題づくりとかですね、試験以外でどういう基準で生徒さんたちを取っていくというところに注力をしてきてもいいのではないかと思います。10 分や、30 分で人間はごまかすということはできますので、まして、これを全校、全生徒でやる意味はないのではないかと思います。

＜学校法人河合塾教育研究部長　谷口哲也氏＞

今回の議論は入試制度の改善に関する仕掛け作りということであって、これが教育に全面的に関わる問題ではないと思っています。したがって、社会に出てから必要な能力とか、子供が持っている多様な「違い」を引き出す観点では述べません。入試制度としては、義務教育の９教科の内申と主要教科学力を総合的に検査し選抜するという基本的な考え方は正しいと思っています。

ただ、入試が教育を規定するという側面も半分あることは、私も過去の懇談会で申し上げてきました。その点から、今回検討された６つの視点の中で、一番私が評価しているのは、４番目の「一般入学学力の検査」の「課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等をこれまで以上に測る内容とする。」という点です。「これまで以上に」というのが、どの程度かというのは、今からの検討になるのですけど、これがいわゆる PISA 型学力と言われる課題解決型の思考力、判断力、表現力を測るものというふうになっていけば、大変評価したい。

そういう前提があった上で、私が提言申し上げたいのは、５番目の「学力検査と調査

書の比率」についてです。Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型というふうに載っておりますけども、普通科高校において、Ⅲ型採用の比率は55%で、半分以上がⅢ型なんですね。ここをもう少し特色づける必要があるだろうと思います。予備校だから学力にもっと比重をかけろと言うことではなくて、学力を２倍にする、評定値を半分にするという新しいⅣ型というものを作れないかという提案です。学力というのは、思考力、判断力、表現力を測定するような内容を十分に持ったものという意味での学力です。学力を２倍にして、評定値を半分にすると、また、受験対策を強化するのかという批判が予想されますけども、その場合の受験対策というのはPISA型学力なので、どんどんやっていいものなんです。多様なものの見方ができないと、取れないような問題なんですね。そういう意味でⅣ型というものを新しく提案したいと思います。理由としては、まず、評定得点の格差が学校や教員により大きいというデメリットをクリアできる可能性があるということ。２つ目が、そういう本質的学力試験に重点を置く選抜というものは教育的意味が大きいということです。もし、これをいきなり導入すると混乱が起こる場合は、学校内にⅢ型とⅣ型を併用するようなコースを作って良いとしたらいい。首都圏や関西圏では理数科とか特進のような公立でも特色のあるコースを作っています。今回の検討結果につきまして申し上げたいのはこの１点だけです。

しかし、もう１つ気になっているのは推薦枠のところです。推薦枠の選抜方式も私は評価していますが、「推薦枠の合格対象外となったものについては、一般入学の対象者とする」ということは、推薦枠を基本に狙っている生徒も一般学力検査を受けるわけなんですね。せっかく受験した学力検査の結果が反映されず推薦枠だけで入学をしてしまうということはちょっともったいない。たとえば、推薦枠を受ける受検生でも一般学力検査に最低基準点を設けるなど工夫があればもっといい。あるいはⅡ型のもっと極端な「評点得点の特別重視枠」を作るとか。従来は、推薦入試、一般入試Ａ・Ｂというふうに３回受験できたのですから、柔軟に対応していいのではないかと思います。以上、２点が私のコメントです。

＜愛知教育大学学長　松田正久氏＞

こうやって今日拝見させていただいて、中野先生を中心にご議論をおまとめになられたことに敬意を表したいと思います。その中で、私も前に申しましたのはですね、１つはこの愛知県自身が計画進学率というようなものを持って、高校進学率が抑えられている、これを引き上げることを併せて、今後の対応に注目している。少子化の時代を迎え、その底上げを一体どう図るのかという少し長期的な展望でもって、今回の入試制度つまり、今までの試験一辺倒ではなく、新しい時代に対応したような形の高・大の接続と同じように、中・高の接続をどう考えていくのか。入試制度の変更だけではなく、入学制度をどうしていくかという観点を盛り込んでこれから先を見ていかないとですね、やは

りこれから先の時代の求める人材をきちんと育てていくということは無理だろうという気がいたします。

それから前も言いましたけど、できる生徒はですね、どういう入試制度であろうと、きちんと、それなりに道をとって行くと思いますが、そうではない一般の多くの７、８割、の生徒をですね、どうプラスアルファの高校教育或いは高等教育へ育てていくかという問題を考える必要があるだろうと。特に大学の進学率を見ますと、決して日本は多くなくてですね、アジア地域でも増えております。これから先のことを考えると、そういう視点を是非持って、検討して頂ければというふうに思います。あと教育の公共性と言いますかね、やっぱり教師や保護者や或いは生徒達のそうしたものをどういうふうにして教育の平等性というものを確保していくかという視点を大切にしていただきたいということでこれを見ますとですね、大変苦労されていて良いと思うんですが、先程ありましたように、推薦入試と内申点のことはですね、僕もやっぱり基準がちょっと高いのではないのかなという気がいたします。というのはですね、推薦入試自身はまさにその子供が中学校の３年間で学んだ、身につけたものを基に推薦をされて受けるわけですから、そこできちっとその３年間の育ちはそこに反映されて推薦枠があるわけです。これを維持されるのであれば、逆に今度はですね、先程言いましたように、判断力だとか、思考力だとか、表現力こういうものを、入試を作られる人は大変だと思うんですが、本当にそういうものがわかるような入試を工夫されて作られたということになれば、そういう基準を持った入試制度ということで、今度のⅠ型、Ⅱ型、Ⅲ型のところはですね、大胆に見直されてやられた方が良いのではないかというふうな気もいたします。

多様な入試というのは、僕は必要だとは思いますけれども、生徒の特性に応じた、そういうふうな入試制度をさらに突っ込んでですね、この検討会議なり、入選協で考えていただければ大変ありがたいなというふうに思います。とにかく、入試は公平性と透明性が大事ですので、その観点から生徒自身が十分満足できる生徒の視点にたって考えていただければ大変ありがたいなという気がしております。

＜漫画家　江川達也氏＞

全体的に見て、まー、そんなに変わってないなという印象があります。それは、否定的な意味でも言えるんですけど、肯定的に言えば、一番最初にこの会に来たときに、愛知県・名古屋市に改革は必要なのかという疑問点があってですね、国際競争力は必要なんですけど、愛知県と名古屋市の良いところは、ぶれないというか日本のへそのような感じでですね、従来の形をそう改革しないでもなんだかんだ言いながらうまくやっている社会があるというのがあって、その中で、この程度の改革ぐらいが愛知県・名古屋市にはちょうど良いのではないのかなという見方ができると思います。

ただ自分は愛知県に住まなくなったわけで、自分個人としては、さっき江口さんがお

っしゃたように、その教育環境として愛知県をチョイスしない人としては、やっぱりチョイスしないぞという感覚になってはしまいますけど、ただ、なんて言うのかな、そうですね、愛知県の変革というのはこの程度がちょうどいいのかなという感じですけどね、馬鹿にしてるわけではないですけどね。なんですかね、急激な変化に対応しないところが良さでもあるし、あと愛知県の人達は学力とか学校以外に習い事をすごいさせてて、そういう特長があるみたいで、世間で言われているのは。学校に頼ってなくて、なんか例えば、スケートだったりとか、手に職を付けるようなところで、習い事をさせている、それにすごいお金をかけている気がするので、逆に教育改革しなくても揺るがない愛知県民の強さみたいのがあって頼もしいのかなと感じがしますけどね。

あとは、東京と大阪にはさまれていて、ＪＲ東海なんかそうなんですけど、絶対儲かるので、すごい変革を必要と迫られていないというのが良いことでもあり、悪いことでもあるのかなと。改革的な視点から言うと、この中で一番皆さんがおっしゃっていますけど、試験の内容がね、考えさせる問題を作るというのが非常に良い方法だと思す。その問題をどう作るのかというのが一番問題になっていて、考えさせる問題を作るとですね、答えは一つではないんですよ、絶対山ほど出てくるんですよ。でも、考えてある答えなんですよ。よく考える人はだいたい先生が嫌なことを答えてくる、先生が思ってもみないことを答える人間が一番考えている人間で、学校の先生をやっている程度の頭でしか、あ、すいません、要は考えて変革的な人は、愛知県でいうと織田信長のような人は常識にとらわれないので、普通の人がエッと思うようなことを回答してしまう。それが得てして、時代を越えてたりするので、それを評価するのはすごい難しいんですけど、敢えてそういう生徒を評価できる懐の広さを持つのであれば、素晴らしい教育県になれると思います。

だから一つの案としては、全体的な愛知県の教育の姿は変えなくてもいいんですけど、愛知県で３つだけ特殊校を作ったら良いと思うんですけどね。特別な変わった人間だけ集めて、それは猛烈に勉強ができるのでも良いし、猛烈になんかの才能があるみたいな。場所は、要するに名古屋と犬山とか一宮とかあそこら辺の中間点と、名古屋と三河の中間点、で豊橋の方みたいな感じで、３つ、東海道沿いかどこでも良いですけど作って、非常に変わった生徒を入れて、入れるために非常に変わった試験を課すと、教師も変な先生ばっかり集めて、民間から集めてもいいだろうし、そういう普通だったら考えられないような試験でだったりとか、カリキュラムであったり、逆に私立ではなくて、公共で作って、実験的にやってみると。それが良ければみんなはまねしていいし、悪ければ物笑いの種にすればいいと。で愛知県に住めなくなったら、東京、大阪に出て行くみたいな、そういうなんですかね、現状を打破する特殊な学校を３つ作ってそこで試験を変えていく、全体を変えるというのはやっぱりついて行けないと思うんですよね、本当に１点突破というか３点突破で変わった試験を作る学校を作れば、ある程度改革はいくん

じゃないかとは思います。以上です。採用されないですよね、きっとね。

＜大村知事＞
　それはあれですか、江川さんみたいな天才漫画家を育てるような学校という意味ですか。

＜漫画家　江川達也氏＞
　俺は天才ではないですけど、愛教大に行って先生になろうと思ったのは、自分みたいに変な生徒でも楽しい学園生活が送れるというか、才能を伸ばせるような学校を作りたくって行ったんで、そういった学校の先生にはなりたい。要は漫画ばっか書いているとか、例えば、フィンランドなんかは物語を作るという教育をさせているんですよね。それでその経済をＶ字回復させたわけで、やっぱり日本の教育って、先生がこうだと言ったことを暗記したり、やったりする人を育てちゃうんですけど、自分で自由に物語を作るという、自分から創造的なことをするという教育をしないとやっぱり産業は伸びないと思うので、実際、フィンランドはそれで伸びているので、そういうカリキュラムを作る学校みたいなのは、そういう先生はやってみたいと思います。

＜大村知事＞
　はい、この点について更にご発言があれば。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞
　あの、私も江川さんのように自由に言いたいんですけど、それは別にして。

＜漫画家　江川達也氏＞
　言ってくださいよ。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞
　いや、そうじゃなくて、私も愛知県に住んでいます。一応これまで、最大公約数的に色々と考えてきました。その１つは推薦枠の受験生に課す学力検査の点です。これもやはり色々と意見が出ました。やる以上は使わないといけないとか。そうすると、推薦っていうものの意味がなくなってしまう、薄れちゃうと。ただ全生徒に実施することによって、たとえ推薦であっても学力試験は受けますので、一般の方に回れば合否に関わります。そういうことで、こういう形で落ち着いたわけです。先ほど、面接が効果あるかどうかですが。大学を見ていると効果ないって言うんですけど、ただ、中学生ぐらいは、割と短い時間の中でもミスが出ちゃうんですね。割と出ちゃうんです。そこもあり、面

接を生かしたいということもあります。
それからですね、格差と競争の話が出ました。私は学習して学んだらいけるとか、頑張ればいけるという状況を作らなきゃいかんというのは事実だと思います。そのためには、高校の特色化ということが言われますが、高校の特色化とは入試だけの問題じゃないんだと思うんですね。だから、第２回の時にも言ったかもしれませんが、例えば、これから少子化になって、今の高校、私学も公立も全部維持して同じようにやっていけないことは事実だろうと思います。そうすると、やはり高校が特色化して、自分のやりたいことを伸ばすという、そういうことができる高校になっていかなきゃいけない。それが大学に直結していった方が良いと、そういう考え方を持っております。
ただ、やっぱり、高校から大学の入試と、中学校から高校というのは違うと思うんですね。義務教育段階から出ていく場合とは。そこはやっぱりしっかり考えないと。入試のことを考えると、愛知県ではこういう配慮が求められたということで、こういう形になったところです。本来的には競争、違いと共に生きるというのは重要なことです。これは、高校へ入ってからの３年間でそれぞれ育てるべきだと思います。入ったところから卒業までは、高校が育てなきゃいかんと思います。そういう点では、学校側がこういう特徴で生徒を育てますということをもっとはっきり出していくということも含めてやっていかなきゃいけない問題だろうと思います。

＜大村知事＞
　ありがとうございました。他にいかがですか。また、最後にまとめてご意見いただく機会を設けますが、よろしいですか。
　そうですか、中学生は面接だとちょっとやったらボロがでますか。さっき、大学生の就活は、そんなものどれだけやったってみんな一緒だからやめた方がいいんじゃないかという話もありましたけど。中学生はそうかもしれんね。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞
　かなり素直に出ます。

＜漫画家　江川達也氏＞
　ボロが出る子もいれば、ボロが出ない子もいる。ボロが出ない子が問題なんですよ。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞
　いや、出さないのもね、一つの特徴なんですよ。

＜関西大学政策創造学部教授　白石真澄氏＞

面接に求めているものって何なんですか。生活態度とか、学習への姿勢とか、やっぱり企業で評価するにも評価者訓練というふうに、評価をする側の基準を統一化するってありますよね、それぞれの学校で面接をやっているのであれば、やはり面接をする側のスタンダードをどう作っていき、他の学校とそれがどう違うのかっていうことを常にブラッシュアップしてこそ、面接が生きると思うんですね。その実態というのはどうなんでしょうか。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞
多分、この面接とか推薦というのは、音楽であるとかそういう学校の比率が高いわけですね。進学校の中には学力推薦をやっていないところもあるのです。例えば、技能とかそういうところでの面接っていうのは、やっぱりはっきり出るわけです。一般受験を含めて全部の生徒にやるのは、やはり何分かであれ、自分の考えを素直にすっと出せる、一応その限られた時間の中で自分の考えを述べられるということで、全部やるわけです。ただ、先程言ったように推薦を全部統一的にやったときに、音楽科とかは、今おっしゃったような面接の工夫はこれまでもしていたとは思うんですけど、これからしていかなきゃいかんことだと思います。それは今後検討していくということになると思いますけど。

＜漫画家　江川達也氏＞
白石先生はどこの出身ですか。

＜関西大学政策創造学部教授　白石真澄氏＞
大阪です。

＜漫画家　江川達也氏＞
多分、名古屋というか愛知県って基準がないんですよね。僕も教員をちょっとだけやっていましたけど、なんか基準なく、何か日本的に空気っていうじゃないですか。それがとてつもなく読めるのが愛知県で、お互いにまぁそうだよねみたいな、そんな感じで基準を決めているような気がして、東京とか大阪へ行くと、やっぱりドラスティックに物事をはっきりさせようとするし、基準を求めるんですけど、愛知県っていうのは、なんとなく基準を決めたらいけないような、そういうタブーを感じますけど。

＜共立総合研究所取締役副社長　江口忍氏＞
よくわかります。

＜大村知事＞
　なんとなく、みんな納得していますね。そうか、そうだよねって。

＜漫画家　江川達也氏＞
　なんか、暗黙の不文律っていうのがあるんですよ、すごく。

＜大村知事＞
　妙に説得力がありますね。
　さて、それでは前半の課題はとりあえず以上ということで、また、後程時間があると思いますからご意見いただきたいと思いますが、続きましてですね、２つ目の課題ということで、体罰問題についてですね、現状も含め学校教育における体罰防止のための指導体制をどういうふうに作っていくかなどにつきまして、ご意見を伺っていきたいというふうに思っております。それでは、まず現状などにつきまして事務局から簡潔に説明をお願いします。

〔事務局から資料説明〕

＜大村知事＞
　体罰と懲戒の線をどこで引くのかという問題は、古くて新しい問題でありまして、なかなか難しい課題でありますけれども、またこれについて色々ご意見をいただければというふうに思っております。それでは、再び江口さんから話を伺っていきたいと思います。

＜共立総合研究所取締役副社長　江口忍氏＞
　体罰に関しては、是認されないということは言うまでもないことなんですが、いただいたデータの中で興味があるところがございまして、「体罰実態調査」に関して、小中高の公立と私立を見ますと、被害生徒数と在校生徒数の割合は分からないですが、学校数でいうと顕著な違いがみられます。小学校に関しては私立の小学校は３つしかないようなので、違いが出るのは当然かもしれませんが、中学校になりますと、公立が 414 校あって、その中の 68 校がそういうことがあったと、割合にして 16.4%、同じ割合を私学で出すと 4.3%で、私学の方が圧倒的に少ない。これが高校になりますと公立が 21.3%で、私立が 21.8%で同じくらいということになっているということを考えますと、顕著な差があるのは公立の中学と私立の中学。これは何が違うのか、あくまで想像の域を出ないんですけども、入学試験があるかないかによって違うんじゃないかと。どうして入学試験があるかないかというところで差が出ると考えるかっていうと、やっぱり私学の

場合、その学校がいじめがあるとか体罰があるとかっていう風評が出てしまうと、それは学校経営そのものに関わってくる話となります。公立の場合には、そういうことがあっても、それは学区で決まってますから、自動的に生徒さんは来ますので、そういう点で、風評というか、外の目というものに対しての敏感さがやっぱり公と私では違うのかなと。高校が一緒になるのは、公も私も受験があるからでして、どっちも悪評がたって生徒さんがこなくなると困ってしまう。そういうことを考えますと、体罰を未然に防いでいくためにどうしたらいいかということの重要な観点としては、やっぱりそういう事実を外に出すということ、これは現在でもそういうことを意識してやられているようでございますけれども、学校の中に留め置かない、教育委員会にちゃんと報告する、教育委員会の中もうやむやにせずに早い段階でオープンにする。そういうことをすることによって、実が出たことによってその学校の評価に対して傷は付くわけですけども、それはそれが故に未然にそういうことがないように、学校のマネージメント層、それから現場の先生方のところで意識付けということで、減らしていけるのではないかということだと思います。ですから結論としてはですね、どうやってオープンにするっていう仕組みをやっていくかということがこの問題にとって一番重要なのかなと感じました。

＜愛知県経営者協会専務理事兼事務局長　柴山忠範氏＞

企業の中でいうと、最近はパワハラが非常にクローズアップされています。この問題は、学校の指導とは少し違うんですが、やはり企業の中でも若い社員を育てなきゃいけない。ともすると行き過ぎた指導ということで、パワハラとか、場合によっては病気になってしまうということもあるので、企業の中も今は教え方を変えたり、新しい指導方法とかを研究して勉強しているんですが、なかなかいい解決方法がないというのが実態です。一つ気になるのが、入社してくる若い人達が、甘やかされて育ってきているので、大人になりきれていない人が非常に多くなってきているんですね。多分学校でも同じようことが言えるのではないかと思います。これは学校だけの問題ではなくて、家庭教育だとか、親のしつけだとか、そういったことに起因するのではないか。だからといって体罰が肯定されるわけではないですが、原因の一つとしてそういったことが考えられる以上、教育委員会もそういった面もオープンにすべきだと思うんですね。一方的に学校の体罰を問題にするのではなく、原因とか背景といったことをオープンにして、みんなで議論して、ではどうするべきかを考えていかないとなかなか解決できない。

企業も同じことで、なかなかうまく教えられない子は正直いって辞めてほしいんですが、そういうわけにはいかないので、コーチングとかといった方法を取り入れてやってるんですが、現実はなかなか難しい。その原因の一つとして、私はやはり家庭の問題にあるのではないかと思っています。

＜関西大学政策創造学部教授　白石真澄氏＞

ご説明いただいた改善の取組は、至極ごもっともなんですけど、果たして実効性があるだろうかと思う項目もいくつかあります。例えばいじめアンケートで、先生の体罰があるかどうかという項目を設けて定期的に学校現場に聞いても、これを読むのが先生だとしたら怖くて書けないですよね。こういうのはやっぱり第三者機関みたいなものが抜き打ちでやった方がいいんじゃないかと思います。いくら国から言われたり、教育委員会から言われたとしても、やはりそれが現場におちてないからこそ、先生達の心の中にストンと落ちていかない。これが繰り返し行われていくわけですよね。

やっぱり時間をかけてやっていく具体的な取組が必要で、一つは教師個人の意識を変えること。三重県でもマニュアルを作ったり、手引きを作ったり、研修をやったりしてますし、多くの人たちが参加してるんですが、やっぱりこうした研修を沢山受ければそれを評価項目の一つにしていくとか、先生達の自助努力をどう評価していくかということとか、あと学校で分かりやすい標語をつくってもいいと思うんです。先生と生徒達で共有して、絶対これはだめなんだということを毎日言えるような標語をつくるといいと思うんですね。

二つ目は　学校の意識の見直し、風土の改革と言いますか、大阪の桜宮高校でも、指導していた補助的な立場の人は分かっていたけれども先輩教員が怖くて言えなかった訳でしょ。だから学校のヒエラルキーで下から上に言えないわけですよね。電話相談なんかも教育委員会以外にホットラインみたいなものを設けてもいいんではないかと思います。子供でもタダでかけられるようなものを作っていく。いつでもどこでもかけられるっていう。一旦そこで受けて、きちっとそれを精査して、教育委員会や学校現場に戻していくということですよね。問題があったときにそれをペナルティとするのではなく、みんなで取り組んで改善をしたことを評価するように評価の仕組みも変えていかなければいけないと思います。

私の周りで20代で部活動の顧問をしている人達に聞くと、本当に滅私奉公と言うか、土日もないですよね。顧問の手当も雀の涙しかつかないですね。やっぱり運動部なんかは特に閉鎖性に問題があると思いますので、できれば地域の人たちでプロを入れてクラブチームにしていくこと、閉鎖性をどう打破していくかということを考えてもいいんではないかと思います。

最後に、柴山さんもおっしゃいましたが、大学でも入試をやると300人教室でゴミを拾うと50個ぐらい拾えます。つまりゴミをゴミ箱に捨てられないんですね。鼻かんだ紙とか、飲みかけのペットボトルとか、缶とか、教室中に置いて帰ってます。つまり、生活習慣が確立されてないようなお子さん達が非常に増えていて、これは体罰を是認するものではありませんけれども、やっぱり先生達がキレる気持ちも分かると思いますし、誤解していただいたらいけないんですが、学校現場で何を教育していくのか、それ以前

に家で何をやっていくのかということを今一度考えていかなければいけないと思いますね。ですから保護者の意識改革も一緒にやっていくような、何か仕組み作りといいますかね、こうした困った子がいるので、教育ではここまではできません、従って学校ではこういうことをやってほしいと。これは校長先生が地域に呼びかけていくしかないと思いますし、保護者の方が学校現場に積極的にでかけていただく、高校になって果たしてこれができるかどうかは分かりませんけれども、先生がやることと、家庭がやることをきちっと峻別していくしかないと思うんですね。ここはみなさんのお知恵で何か仕掛けを考えていただければと思います。

＜学校法人河合塾教育研究部長　谷口哲也氏＞

体罰問題の本質は、基本的人権の侵害だと思っています。基本的に生徒には人権があって、それを尊重しなければならない、当たり前のことですね。その一つが体罰問題に現れていると思います。河合塾は予備校中心ですから、体罰こそないですけども、セクシャルハラスメントとかパワーハラスメントとかいじめなども含めて、ハラスメントがありますので、敏感に対応しています。ハラスメントは企業イメージを悪くするだけでなく、生徒からも講師からも保護者からもクレームがくるということになったら、存続できないわけです。

そこで 10 年ぐらい前にハラスメント防止委員会を作りました。本日の配布資料「改善の取組」の(3)体罰の再発防止に「不祥事防止のリーフレットを全教員に配付する」とありますけど、河合塾では「ハラスメントのない学び場に」というリーフレットを 4 月に生徒全員に配っています。そこには、北から南まで校舎ごとに相談者の名前と相談窓口と連絡先が書いてあって、電話、メール、面談、手紙などを使って、匿名でいいので、ここにかけ込んでほしいと書いてあります。そして相談窓口に来たら、相手に処分を望まないという場合には、調整・調停という段階に進みます。相手に処分を望む場合は、調査を調査委員会が行って、最終的に措置決定をします。もちろん本人だけではなくて、保護者や友人もＯＫです。プライバシーの保護が前提なんですけれども、そういう相談や申し立てが直接窓口にできる制度を 10 年前から作っています。

当初はセクハラだけだったんですけど、３年前からパワハラやいじめを含めたハラスメントの窓口として機能していて、研修会もやっています。活動報告も毎年、職員に冊子になって配られます。実態は 2009 年度から毎年減ってきています。こういう制度や研修を通して、ハラスメントのない学び場にしようという意識が生徒や講師に伝わることで「予防」する面があると思っています。

つまり、問題意識を全体化すること、そして企業、学校あるいは県が本気になって制度の流れを作っていくことが重要だと思います。今回のテーマに沿っているかどうかわかりませんが、河合塾の取組を紹介させていただきました。

また、私個人の意識としては、指導者にちょっと意識を変えてほしいというふうに思っていることがあります。それは「リーダーシップ」ということです。今までは、教員はひょっとしたら「ボス」であったのかもしれませんが、これからの教育現場では教員は「リーダー」であるべきではないかと思います。

あるイギリスの百貨店チェーンの創業者の言葉を借りると、「ボスは権威に頼る、リーダーは志・善意に頼る。」「ボスは恐怖を吹き込む、リーダーは熱意を吹き込む。」「ボスは時間通りに来いという、リーダーは時間前にやってくる。」「ボスは仕事を苦役に変える、リーダーは仕事をゲームに変える。」「ボスはやれという、リーダーはやろうという。」、そういうことです。上からものを教えてやるぞという立場ではなくて、生徒を導いてあげる、一緒に学ぼうとする、こういったタイプの指導者に変わるべきではないか。個人的な考え方なんですけれども、教員の指導者意識を変えないとこういう体罰問題への対策がモグラたたきになってしまうのではないかと思います。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞

体罰調査結果でも、高校が一番高くなっていますね。実はこれは皆さん共通だと思うんですけれども。上に上がれば上がるほど実は教科とかでいろいろ分かれてくるんですね。例えば、美術にしろ、体育にしろ、たぶんその教科の先生の居場所になっちゃっているのだろうと思うんですね。小学校までは職員室にみんな集まってくるわけです。そうすると情報が共有できるわけですね。しかも同じ体育なら体育の先生の共有した社会になっちゃうわけです。そうすると、そこで起こることは、なかなかそれ以外のところには出てこないというところがある。

高校というのは勤務が比較的長いですよね、私の知っている先生は、十何年そこにおったわけです。そうするとね、やはり、そこに居すぎちゃってですね、そこでやることがもういいんだということになっていきます。すると、他の人が入りにくいということがあると思うんです。

やはりですね、先程白石さんがおっしゃったように、教員間でどういうふうに情報共有できるかです。ただ、教員だけじゃなくて、保護者であるとかね、いろいろな人を含めた、定期的なものは必要ですね。保護者で家で叩く親もいるわけです。子どもの頭を叩いている人が、学校はやっちゃいかんと言っている。そういう共有されていないところに問題があると思うんです。そういうところを含めまして、是非何らかの定期的に情報交換するところもあっていいと思います。

実は、私はこういう研究もしていました。教員というのはいろいろ大学で学びます。指導法などを。学んでもそういうことをほとんど使っていません。何を使っているかというと、自分が学んできて一番いい方法を使って指導しているのです。ということは、よくありますよね。自分が過去に受けた教育がいいと思い込んで、それを実施するケー

スが案外多いんです。自分はそういうことをやって育ったんだと、そういう感覚は身に付いちゃっています。先程おっしゃったように、やっぱり教員、指導者とかその教えるっていう立場になったときに、どういう立場になるか、そういう機会を作ってやっていかなきゃいけない。改めて教育は必要ではないかと思っております。

昔からよくいわれていますけども、あんまり自分が成功した人というのはいい指導者にはならないというのは言われたことでありますよね。ある程度自分が出来ちゃった人は出来ない人の気持ちが分からないんで、手が出てしまう人がいるんですね。何故できないのかが理解できないのです。やはり教育の根本は、違いを認めるということを、まずは共有していかないとなかなかこの問題は解決していかない。具体的には先ほど言ったように、どこかで保護者等を含めて地域の人を含めてですね、なんらかの形で情報公開して共有していかなければいけないのではないかと、そう思っております。

＜愛知教育大学学長　松田正久氏＞

文科省が４月 26 日に、全国の体罰の実態把握についてという第１次報告を出していますが、愛知県でも中学校が文科省統計によりますと５割、高等学校が 25%、小学校 25%ですから、大体ほぼこの割合になっているので、愛知県もこの縮図なのかなと思います。発生件数ですね。学校数、それから発生件数が若干高等学校のウェイトが高いですが、まぁ概ね全国の状況と同じような格好できているんだなぁという気がいたします。

それで、まず先程谷口さんがおっしゃったように、どこでも、ハラスメントというのはですね、大変気になるところで、しかも国立大学、うちも附属学校がございますので、そこでも体罰等々が問題になります。

少しここにメモを用意しておいたのですが、先程おっしゃったように、体罰は基本的人権を無視したは人権侵害だということをきちんと確認することが大事です。うちは教員養成を主にやっている大学でございますので、このことは徹底して教えないといかんということも含めてですね、やっぱり体罰をした人の声を聴きますとですね、要するに愛情の表われだと。そのことによってですね、教育の熱意を伝えるんだというようなことをおっしゃる。だけどそれはやっぱりいろいろ聴きましてもですね、後付けの理由であってですね、自分の行動を合理化することに使われているという側面が非常に強いのではないかというふうに思います。

そういう意味で言えば、私のメモにございますが、教育と体罰の４つ目にありますように、うちの大学院の学生だったんですが、去年、ロンドンオリンピックに出場した学生がいました。この学生は中野君といいますが、彼は４月から小学校の教員になって頑張っているんですが、この週末に全日本陸上がありまして、そこでトップになれば世界陸上があるんですが、教員になっても自分の記録を縮めているんですね。のびのびとした練習に取り組む中で、自主性が育ち、本人の潜在能力を発揮する好例だと思います。

それで、まず大学で心配されるのは部活での体罰、上級生から下級生への体罰も心配されていますので、大学でも即調べました。この問題が問題になっている時にですね。幸い無かったのですが、そうでない中できちんと育つという見本として、こうやって教員になって頑張っている学生がいるということはありがたいなと思っております。

そういう意味で言えば、昨今の中教審の「学び続ける教員」というようなことが一つのキーワードになっておりますが、そうした中でどういうふうに育てていけばいいか。体罰はやはりやってはいけない、あるいは人に与えてはいけないものだという自覚というか、そういうものを教育の中にどう位置づけていくかということを、愛知教育大学では、ここに最後に書いてあるように、基本的人権と両性の平等を尊重するということで、人権侵害のない大学を実現する。つまり実現すると書いたということは、逆に言えば今あるということですよね。実現できていないということです。

確かに大きな意味の体罰はございませんが、いわゆるハラスメント、さっき谷口さんおっしゃいましたように、セクハラ、あるいは最近多いのはパワハラです。それは中野さんの言葉でいえば暴力的な行為、あるいは体罰を受けた生徒が大きくなって体罰を肯定するような傾向が多いというふうな統計が出ておりますけれども、逆に言えば体罰を受けていない学生はそれを否定すると。だからその逆に言えば体罰を受けた学生が大きくなって体罰を認めるような傾向にあるということですが、学生に対して絶対にそういうことはダメだよという話です。最近はアカハラが多いんです、大学は。アカハラというのは、アカデミックハラスメントですね。つまり教員が、さっきおっしゃったように、自分の経験知で学んだことをもとにそのまま学生に対応する中で起こります。

最近の学生は、なかなか挫折感を知りませんので、それを自分に対する攻撃だと思ってしまう。それでくじけてしまう。それで教員をアカデミックハラスメントで訴えるという事例が多くなっている。教員が経験知でもって話をする、学生に対応するから。今の若い人たちの成り立ちを理解していない。

そういうことは大変悪影響を与えるような側面がありますので、精神科医に教育組織毎に回ってもらって教員に講義してもらっている。そこまで徹底してやって、研修を繰り返して繰り返してやっと理解できる。

そういう状況が今たぶんどこの大学でもあると思うんですが、心を病む学生をいかに少なくするか。ここを見ますと中学校が件数が多くて、割合では高等学校が一番多いんですけども、そういう研修をきちんとやられる。いろんな注文がきますし、やはり地域を含めいろんな所の協力体制でもって研修をやられる、もちろん研修でやるんでしょうが、大学とも連携してそういう風な対応をやられるとどうかなということを含めてです。今の若い人を理解することも非常に大事なので、やはり我々が育った時代と違いますから、その違いを明確にしながら、どういう風に若い人たちを育てていくかということが新しい課題となっています。発達障害とかいろんなお子さん達が見えますので、そうい

う対応を組織的にきちんとやられるような方策、或いは研修の方策を作っていくということが大事だろうと気がします。

＜漫画家　江川達也氏＞

体罰以外におもしろい話がでたのでそれに対して意見を言わせていただきます。今、若い人たちの理解を深める研修が必要だとおっしゃったんですけど、あと、違いを認めるということ。それはすごく納得がいく。それはそうだと思うんですけど、そのためにまずやらなければならないのは、一度、若い人と同じスタンスに自分を置く。やっぱり先生を長くやっているとだんだん、ぬるま湯と言うと失礼ですが、非常になんか殺伐というか、将来の不安なんかがなくなってしまって、やはり長く安定した職業についている人と不安定な人とは違っていて、不安定な研修というか、そういうものを受けられたら教員も変わるんじゃないか。生徒達の不安感を教員は実感できないんじゃないかと思うんですね。その場所にいないんで。今、将来不安だと思います。若い人は。すごく流動的で。でも、教師の方は不安定でないためにそこに断絶がある感じがすごくする。それはフリーランスか安定したところにいるかの違いで、そこで発想がどんどん変わっていくなというのが１点。

あと教育大学でいろんな教育に必要なことをいろいろと教えていらっしゃるとおっしゃられましたが、俺も教育大学にいって一番思ったことは、使えないんですよね。ほとんど、実践に。教育大学で学んだことがね。だから教育大学の実践に向いた教育をすべきだぁというふうにすごく思いました。

＜愛知教育大学学長　松田正久氏＞

昔はそうだったかもしれない。

＜漫画家　江川達也氏＞

今は知りません、今は教育大学に行ってないんで。昔は非常に使えねぇなぁという感じがありました。あとは白石先生も提起されてましたが、やっぱり親なんですよね、一番問題は。先生をやっていた時に一番思ったのは、なんか生徒だけでなく親も一緒に学校に入れて、教育してやりたいなという勝手な思いをしてしまったんですけど、基本的生活習慣なんで、愛知県全体でどうするかという問題で一番いい時期は、お母さんがお子さんを産んで育児に悩まれている時があるじゃないですか。そういうときに母親と子どもと一緒になんかこう、いろんなことをできる学校というものを作ったら、そういうものは解決されるんじゃないかなという風に思います。幼稚園より前に、母と子どもが生活習慣とかそういうもので集団でやっていけるような、そこらへんで母親と子どもをペアで教育できるシステムというものを作れないですね。無理ですね。まぁいいや。

＜関西大学政策創造学部教授　白石真澄氏＞
　それはお父さんもやってくださいよ。

＜漫画家　江川達也氏＞
　うちは結構やっているんですよ。私は非常にやってますけど。お父さんと一緒に子どもとね。ちょっと問題なんですけど。他のお母さんの前では。あとですね。体罰の話ですけど、さっき出た自分が体罰を受けてよかったという人が体罰をしてしまうという例に俺がはまるかもしれないんですけど、僕は体罰容認派なんですよね、基本的に。
　法律で禁止されているんで、最後に解決策は言いますけど、小学校の時の先生で、ビンタされた先生がいて、その先生が一番好きな先生なんですよ。大体先生ってなんか突っ込んでこないっていうか、事なかれ主義の中で、その先生は体罰までしちゃうくらい熱く来てくれたんで、すごくそのなんだろう、体罰というものに対してだめという感覚がないですね。むしろ事なかれ主義の先生のほうが、なんか嘘をついていて本気感がないなという感じがしちゃいます。
　結局何が言いたいかと言うと、解決策にもなるんですけど、言ってみれば、今、生きている実感がないというか、先生と生徒との間になんかよそよそしさというのがどんどんどんどん増えてしまって、今の子どもも生きている感じがしなくて、なんか曖昧な世界の中で生きているみたいな、そういうものを解決しようという一つの発露が、肉体を使ったコミュニケーションじゃないかなというのがあって、体育会系なんで自分も、なんかすごくこう肉体的負荷とともに美しい思い出があると。そういう部分もあったりして、なんというのか、生きている実感があるという教育を、体罰という形じゃなくて、合法的にそういうものをもうちょっと増やすべきではないかと。昔は自然の脅威がそれを人間に教えてくれたんじゃないかと。要するに空腹であったりとか天災であったりとか、いろいろな不具合とか不便であることが、一つの教師であったと思うんですよね。
　だからもっと野外活動とか、僕らの小学校の時は中津川のキャンプ生活とかがありましたけど、ああいうぬるいキャンプ生活じゃなくて、もうちょっと１か月くらい自然と闘うみたいな、火をおこすことから始めるとか、そういう軟弱な子どもに自然の厳しさみたいなものを教えるようなカリキュラムを入れて、それで熱血教師がそれを一緒に戦うみたいな、そういうカリキュラムに持って行けば、体罰というものが自然と一緒に戦うみたいな形で昇華されていくのではないかと、人間の闘争本能をどうやって教育に入れていくかということを考えるべきではないかと思います。

＜大村知事＞
　江川さんは小学校とか中学校の頃、体罰とか受けられましたか。

＜漫画家　江川達也氏＞
　だから小学校のその先生に一番受けました。

＜大村知事＞
　中学、高校は。

＜漫画家　江川達也氏＞
　中学もちょっと。でも、中学よりは小学校のほうがありました。中学はうまいこと逃げました。要領よくなったんで。先生との距離がすごく遠くなっちゃったんで。体罰を受けないいい子になっちゃったんで。そこから学園生活がつまらなくなったんですけど。高校もないですね。

＜大村知事＞
　普通、高校は部活以外ないでしょう。

＜漫画家　江川達也氏＞
　ただ、部活は先生の指導ではないんですけど、先輩がすごくむちゃくちゃひどい練習を過酷に。水泳部だったんですけど、4月に水温が14度ぐらいの時に何千メートルも泳いだりしましたけれども、それは体罰の範疇よりも厳しかったですけど、それもいい思い出になっちゃって、そういうものが染みついているんで、俺も体罰教師かもしれないですね。教師だったら。

＜大村知事＞
　先生方のもそうだけど、先輩のしごきと称する、まぁいじめだね。

＜漫画家　江川達也氏＞
　ただ、今思うとすてきな懐かしい思い出になっちゃっている人も結構いるんですよね、体育会系は。でもその分逆境に強くなったというのはあるんですよ。だからそこらへんで矛盾するんでしょうけど、法律で禁止されているけど、それが人権の侵害だというふうにも言われるんだけれども。ただ、自分は人権侵害だとは思えない。自分はやろうとは思わないけど、ただああいう限界に挑戦するという感じは、なんか人生の中で、ずうっとそうなんですけど人生の中で、そういうことってやっぱり教育の中でも大事かなというか。軟弱な子どもが増えているのはどうかと思います。ただ自分の子どもには体罰はあまりやっていないです。

＜関西大学政策創造学部教授　白石真澄氏＞
　今、大阪の桜宮高校のことが世の中で話題になっているからこそ、今ここで体罰が議論になっていると思うんですけど、たとえば家庭内暴力にもＤＶにも４つの定義があるように、やっぱり体罰以外に精神的なプレッシャーとか無視とかいろんなことがあると思うんです。是非、フィジカルな肉体的なものだけにとらわれずに学校現場でのやはり精神的な、プレッシャーとか他の子との差別的な扱いとか、そういうものを含めてどうするかという視点を広げて対応策を考えていただきたいなと思います。やっぱり人間ですから好き嫌いはありますし、その日その日の気分で生徒の扱いを変えるということも多々あることだと思うんですけど、是非視点を広げていただければと思います。

＜漫画家　江川達也氏＞
　要は体罰ということでなくて、距離感というんですかね。そういう方向だと思うんです。だからすごく無視していくよそよそしい先生より、体罰してくれたほうが嬉しい時がありますから、だから一番はなんというのか、生徒と先生がどれくらい距離感があるかというか。

＜愛知教育大学学長　松田正久氏＞
　信頼関係ですか。

＜漫画家　江川達也氏＞
　そうそう信頼関係ですけど。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞
　そういうものが希薄なっているというか。

＜漫画家　江川達也氏＞
　信頼関係というか。人と人との距離と言うか。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞
　多分、よく信頼関係があればいいんじゃないかと聞くことがあるんですね。ただ、信頼関係があると思っている先生もいる。どういうことかと言うと、信頼関係ということに、先生もすごく困っているのは、今の子どもは結構べったりとくっついてくる。そして、もしも先生が認めてくれなかったたら大変です。すごく距離を保つのが難しいんです。先生というのは、いろいろ違う子どもがいるから大変なんです。先生がそれぞれの子どもとどう距離をうまく保っていけるか。親と同じことを子どもが先生に求めてくる

時代だと言われていて、そういう点では先生のところに来た子どもを中々引き離せない。そういうこともあるのです。

結論を言うと、先生がもう少しゆとりを持てるようにすべきですね。本当は担任を持たなくて、全体を眺める形の、例えばカウンセルマインドを学んだ人、ゆとりをもって関わる人、先生の資格を持った人で、やはりこの全体を眺められる人がいるという状況があってもいいんじゃないかと思う。そういうことがあれば、先生にもゆとりができてくると思うんですよね。ゆとりのないことも原因としてあると思うんですけど。その上で信頼関係があれば。私も人に聞いたんですけど、先生は信頼あると思っていても、実際聞いてみたら生徒は全然信頼を持っていないこともあると。だからちゃんとそれを読み取れる先生でなければ。

＜大村知事＞

読み取るのは難しいんじゃないですか。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞

いやどういうことかというと、その人は、あまり言っちゃいけないんですけど。私の教えた人で、できるだけ話を聞いてあげようという努力はものすごく分かるんです。だけど、その先生は勉強ができても体験をいろいろしてないんですね。

＜漫画家　江川達也氏＞

要は高校入試より先生の資格の方が重要ですね。

＜愛知淑徳大学文学部教育学科教授　中野靖彦氏＞

言わせてもらうと、教員の養成を考えていってほしいんですよ。４月１日からいきなり先生になる世界だと中々難しい。４年間というのをどうするか。だからそういう点では教育実習もインターンシップとかを入れて、半年間くらいでやっていくとか、そういうことで長い目で子どもと触れあっていくということが必要かなという感じがしております。

＜漫画家　江川達也氏＞

テレビでみたんですけど高校とか中学とか、やめられた警察官とかを入れてうまく経営しているところがあるんで、そういう外部の人が先生の補助をするようなシステムはどんどん入れていくといいと思います。それは元警官じゃなくても、元企業の人でも何でもいいんですけど、先生だけの学校じゃなくて他の人達が先生になって補助できるようなシステムを１校でも２校でもテスト的に増やしていくと、その中で先生も外部の目

がありますから理不尽な体罰はなくなるんじゃないかなという気がします。

＜愛知教育大学学長　松田正久氏＞

開かれた学校、教員と生徒がともに育つ学校になるような学校づくりをきちんとやらないと。外からみて学校がわかる。やはり隠そうとする体質がやはりあるんでしょうか。そうではなくてそのことも含めて外からみて透明性が確保された学校づくりをどう作っていくのかというのが、体罰の問題と一緒なのではないかと思います。どういう子どもを育てるか、どういう生徒を育てるかを外から見て分かりやすいやすいようにどんどん出していくような形が地域で育つ、或いは地域で作られていく、そういう学校づくりをもう少し長いスケールで考えられるそのしくみをきちんと職員の中で共同でできるような、そういうことが必要ではないですかね。

＜大村知事＞

ありがとうございました。他にいかがですか。よろしいですか。体罰の問題は全国的にも色々なケースがありまして、私ども愛知県でも、大阪と並んでそういった注目されるようなこともありました。個別なことをあまり申し上げてもあれですが、ただやっぱり、ある学校の部活の指導の先生がその学校を非常に有名にしたと。でもってその、熱血指導が行き過ぎたといったことであった。そうなるとなかなか学校の中もその方にものが言いにくくなると。あとその同窓会とかですね、父兄会も、いやあの先生はいい人だと、それくらいのことはいいんだと言う話を我々のところに結構ご要請をいただていたと。でもなんかやっぱそうやって全国大会にどんどん出て、そういう引っ張っていく人になると確かにそういう声が出てくることはあると思うんですね。それはそれで、だからと言って、それがＯＫだと言う話にはなりませんからね。そこはやっぱり一線をひいていかなきゃいけないんだろうなということだと思いますね。

他の部活でもね、いろんなスポーツでも全国大会にいくのは、愛知県の場合、県立より私立高校のが強いので、野球なんか特にそうなんでしょうけど、昔ではよくあったんでしょうけど、力任せのなんかそのね。僕はないというふうに聞いてますけどね。そんなん変わってくるんでないかというふうに思いますが、確かに言われた様に、外部の目とか開かれた学校とかですね、具体的にどうするかはやっぱりいろんなことを考えていかないといけないと思いますが、大きな目標としてはそういった学校づくりということかなぁということを思いますし、江川さんが言われた距離感とかね、やっぱり生きる教育という、だんだん江川ワールドに入ってきたという感じが。（笑）

＜漫画家　江川達也氏＞

昔はあったんですよ。

＜大村知事＞
　江川さん、１つ学校を作ったらどうですか、自分で。

＜漫画家　江川達也氏＞
　インターネットの世界でちょっと作り始めていて。

＜大村知事＞
　そうですか。それまた是非楽しみにしたいと思います。
　この問題はまた引き続きですね、我々しっかりと注視をし、今日いただいた御意見をしっかり生かしていきたいと思っております。またあの、最初にご意見いただいた高校選抜制度についてはですね、とりあえずそういった形の意見のまとめということでありますが、これからたくさんの方のご意見をしっかり聞いてですね、やっていければと。まだまだいっぱい意見を聞いてやっていかなくてはいけないというふうに思っております。江川さんから、そう改革しなくてもこの程度でと。（笑）

＜漫画家　江川達也氏＞
　そういうわけでは。

＜大村知事＞
　まあ、なんとなしにですね。

＜漫画家　江川達也氏＞
　安定感も１つのよさだと。

＜大村知事＞
　いや、私はあまり具体的にこうしたいだの言いませんが、本当はちゃぶ台ひっくり返す予定だったんですけど、この話は。

＜漫画家　江川達也氏＞
　ひっくり返してくださいよ。

＜大村知事＞
　いやいや、やっぱり世の中民主主義だぁと思ったのは、あまりにも多くの人たちがそんなことしちゃいかんと言う方のほうがやたら多くてですね、なんとなしに多勢に無勢

かなと言う感じがいたしましてね。

＜漫画家　江川達也氏＞
　全体を一遍に変えようとするから反対があるんで。

＜大村知事＞
　皆さんの意見を聞くとだいたいこんな話になってくるんですよ。

＜漫画家　江川達也氏＞
　特殊なところを、重点校をつくればいいと思う。

＜共立総合研究所取締役副社長　江口忍氏＞
　知事のお考えを言われたほうがいいんじゃないですかね。

＜大村知事＞
　なかなかね、過激なのであんまりねえ、私のあれはね、言っちゃいかんとみんな言わせてくれないので。時々あの隣の建物に河村さんが言いたい放題言ってるのを羨ましく思うときがありますがね。ただ江川さんが言われたやっぱり３つくらい特別な、何をやってもいいような学校をつくるというのは、なんとなしにこの話は非常に魅力的だなと思って聞いておりましたけど。

＜漫画家　江川達也氏＞
　愛知県の人って、なんとなく良くなるとすぐ来ますから。自分は変わらないけど、状況がなんかこっちのほうがいいなって思うと、さっと変われる。

＜共立総合研究所取締役副社長　江口忍氏＞
　そういう学校というのは、ある程度すでにこの地域で評価されている学校でやらないと、お客さん来てくれないんじゃないかなと。だから旭丘とか岡崎とかそういうところクラスじゃないと。

＜漫画家　江川達也氏＞
　俺は新設校を作って、教師がすごい、ここらへんに出席されている方も集まったりとか、すごい変わった人を先生に呼んで、選抜する入学試験が非常に独特な入試、すごい考えさせる、一日考えさせるとか、変わった生徒をそこで、要するに、こんな試験をやる学校だったら行ってみたいと思うような学校に。愛知県には無理っすかね。（笑）ただ

最初は他府県の人を集めてみる。全国からここだけはちょっとおかしな、面白いことをやってるという。

＜共立総合研究所取締役副社長　江口忍氏＞
　海陽学園みたいな。

＜漫画家　江川達也氏＞
　自由っていうよりも、むしろ異様に数学に特化しているとか、あの美術に特化しているとか、そういうすごい何か才能あふれたというか、自由っていうよりもっと、なんだろうなあ、まぁまぁいいっすけど。イメージはあるんですけどね。特徴をもった。多分、全国で教員を集めたら来る教員はいると思うんですよね。変わった人は。やりたい教育は。ただ、その箱がないんですよね。お金もない。

＜大村知事＞
　お金は愛知県も今、財政が非常に厳しい。

＜漫画家　江川達也氏＞
　３校くらいは、あとはほら、もう退官された人で、なんかこう新しく教育をやりたい人とか、安い人とか、まあいろいろ、だからなんか箱を作ってあげると多分集まってくる人はいるじゃないかなと思うんです。

＜大村知事＞
　いずれにしてもですね、だんだん少子化で子供の数が減ってくる。当面はしばらく愛知もおかげで中高生まあ数はあれなんですけど、ほぼ横ばいでずっといくんですが、ほかはどんどん減ってますよ。減ってるとこばっかだもん。去年もですね、人口自然増、全国で、一番は沖縄ですが、二番はうち。ということは実質、だから沖縄はちょっと特殊なので、本土では一番自然増が多いんですよ。ということは、全体的に減っていくけど、ただあと 10 年、15 年くらい先を見ていくと、高校は今の学校の数じゃあね、維持できないですよ。そういう意味では、無茶苦茶やれるような学校を作るって言うのは、非常に魅力的だなと聞いておりました。

＜漫画家　江川達也氏＞
　普通ではやらない。河合塾のクラスで、隣が代ゼミだったりとか。
　あとはアメリカンスクール的なのとか、インドスクール的なのとかいろんな。結局今の教育に満足していない人はいるはずなんで、そこをこうなんかついてくるようなもの

を。まぁ、まだ愛知県余裕があるんで。

＜大村知事＞
　なんかやるんだったら、今から考えておかないと。

＜漫画家　江川達也氏＞
　１校だけ。

＜大村知事＞
　まあ、その時には江川さんに、是非また。

＜漫画家　江川達也氏＞
　俺、漫画教えますよ。

＜大村知事＞
　校長先生として赴任をして。

＜漫画家　江川達也氏＞
　校長じゃなくて、数学と漫画を。

＜大村知事＞
　たくさん御意見いただきましてありがとうございました。またいただいた御意見をしっかり生かしてですね、やっていきたいと思っております。また、次のテーマを設定いたしまして、また日程を調整させていただいて、またこの会は引き続き続いていくということでございますので、よろしくお願いします。今日は本当、お時間いただきましてありがとうございました。

以　上